

第二部 特別寄稿

アジアにおける体制変容

アジア—ヨーロッパ交流の4世紀

レオナルド・ブリュッセイ

アダム・スミスは、世界史における最も重要な出来事は何だと思うか、と訊ねられて、自分の考えによれば、地球規模の歴史において最も重要な事件は二つあり、ひとつはアメリカの発見であり、もうひとつは喜望峰経由のインド航路の発見である、と答えたという。言い換えれば、スミスは新旧世界とヨーロッパとの連関形成というものをたたえたのである。よく知られているように、ヨーロッパのアメリカに対する衝撃は、基本的にその大陸を変容させた。アジアとヨーロッパの間の出会いの歴史は、それとはまったく異なった物語であり、終わりの知れぬ絶え間のない相互交流の物語である。

やはり、バスコ・ダ・ガマ以来のアジア—ヨーロッパ交流の400年の弁証法を、変容する結びつきに対する調整としてみなされる歴史上の三つの画期に焦点をあてつつ、研究することは可能であろう。かなり興味深いことだが、スミスがこの非常に重要な質問に直面したときに、アジア—ヨーロッパ関係は、フランス革命と産業革命の結果生まれた、さらに第二の重要な大発展の前夜にあった。これは、植民地に根本的な変容をもたらすものであった。

17世紀初期におけるアジアに対するオランダの拡張は、まさしく、ポルトガル人による喜望峰経由航路の発見後100年にあって、アジア全体を覆う自律的な国家形成過程という注目すべき趨勢と時を同じくしており、これらはVOCの職員によって十分詳しく目撃され記述されている。たとえば、サファヴィ朝ペルシャ、ムガル朝インド、アユタヤ王国、ジャワ島のマタラム王国、清朝中国、徳川日本である。もちろんその他にも少数ではあるが他のヨーロッパ人による観察も、私たちに詳細な情報を残している。しかし、VOC文書が私たちに与えるのと同じ広い視野に立つ把握は、決してどこにもありえない。アジア海域へのオランダ人およびイギリス人の渡来は、また、この地域全域における商業上の根拠地を確立する結果となった。このうち周辺部分にあるいくつかのものは、おそるべき皇帝の恣意に苦しめられ、また、その他、モンスーン・アジアの海上ルートにそって存在する戦略的拠点、地域的支配者やポルトガル人からの野蛮な軍力によって激しく攻略された。

第二のアジアにおける重大な体制変容は、アジアそれ自身と西洋世界に同時に起こった展開によって、もういちど開始されることとなった。現地人による「国民国家」や「植民地国家」の形

態をとった大帝国の解体とより小さな単位の形成であり、また、西ヨーロッパを起源とする産業および民主革命の地球的規模での衝撃である。ケンブリッジ大学の歴史家であるクリストファ・ベイリーは、世界史のより広い文脈の中でイギリスの拡張を捉えるべく、帝国を可能とした現地における過程を説明しようとした。彼は大きなイスラム帝国群、すなわちオスマン帝国、サファヴィ朝ペルシャ、ムガル朝インドそしてジャワ島のマタラム王国の解体ですら、アジアにおける社会変容の結果と見ている。この変容は様々な要因、たとえば政治的な不安定、の結合によっている。つまり、これらの帝国群が外部からの攻撃によって打ちのめされるより前に、確実に社会経済的な変化によって空洞化していたというのである。ベイリーは、これらの政治体の分割・縮小の中に、地域化指向、貨幣経済の拡張、周辺における強硬な部族的集団の発生や、アジア資本主義の勃興を見出した⁽¹⁾。実際、1780年から1830年の50年間、それは18世紀と19世紀をつなぐ50年であり、この間にアジア-ヨーロッパ関係は新しい時代に入り、最終的には成熟した西洋帝国主義へといたるところとなる。

20世紀の二度にわたる世界大戦は、帝国の基盤をふかく揺り動かし、西洋による植民地的な管理からアジアを最終的に解放するために必然的なものであった。この解放は、冷戦時代としてよく知られた激しいイデオロギー闘争が行なわれた30年間ののち、アジア社会の民主化と通信革命の結果としてのものであった。冷戦時代は、自由な国民国家へのアジアの脱植民地化過程と時を同じくしたものであったが、この過程はベトナム戦争の結果終焉を迎えたのである。我々は今も依然として別の形をとった再構築の作業を目の当たりにしている。今次の変容は新しい地球規模の秩序の創出であり、その中でアジアとヨーロッパが相互の絆を再定義しつつある。ヨーロッパをアジア大陸の巨大な陸地の単なる突起部と再びみなす時代はそう遠くはないのかもしれない。ポール・ヴァレリが雄弁に語るように、アジアの岬 (cap d'Asie) に過ぎないのだ⁽²⁾。

地球規模の歴史における、これらの三つの重要な時期のうち、最初の二つ (1630-80年と1780-1830年) は、事実上歴史の領域に属しており、最後のそれは、まさに現在進行形である。これらの画期が特に研究に値するのは、これらが、関係したアジアやヨーロッパの人々によって、すべて経験されたものであり、非常に詳しく文書として記録されているからである。とはいえ、困惑すべき量の文書史料の山には、共有された過去の経験を包含し取り扱うための新しい分析手段が必要である。実際、新植民地主義ないしは国家主義的傾向から離れて、過去と現在の経験に改めて取り組むこと可能にする魅力的で新しい接近方法がある。いわゆる「体制変容」という接近方法で、これは社会学者や政治学者によって最近展開されてきている。

『移行論』つまりは体制変容の研究は、今日熱く議論されている問題である。なぜなら、とくに東ヨーロッパ、中東、ラテン・アメリカやアフリカにおいて、政治的文化的再構築の時代が生まれてきており、また、そうした過程にあるからである⁽³⁾。

体制変容や物事が進化する特殊な過程の研究は、歴史家や社会学者に対して、しばしば混沌とした状態にある物事を体系化し、理論的に分析するための、理論的なモデルを設計するよう強く促してきている。体制変容には基本的に4つの局面が存在することは、一般的に承認されている。すなわち、政治的、法的、経済的、そして文化的の局面と別けて考えることができる。政治的の局面に関しては、ただ体制における個人の変容ではなく、基本的に政治体制の変容を証明してい

るのだと言わねばならない。この変容の過渡的な段階は、制度的な崩壊、ないし、よくある政治的な衝突の初期的な段階と特徴付けられる。—そしてこれは再構築と統合強化の段階へと続いている。この制度崩壊は、時によっては外因（戦争、脱植民地化、軍事介入）により、あるいは、内因（改革、交渉、革命）により、体制の漸次的変容にもかかわらず、すなわち突如起こるかもしれない。

これに関連して、新旧体制の関係性は重要である。社会経済的衝突は、資源の再配分によって解決されることがある。イデオロギー的な衝突は、しかしながら、心性の変容を必要とするものである。体制変容は、その意味において、法的局面を備えている。法はしばしば政治的再構築の手段となる。法は、一方で旧体制を否定するとともに、新秩序を正当化する。そして、経済的局面であるが、これは、まず、経済的復興、すなわち、通貨体制の再組織化、財政機構の修繕、インフラストラクチャの復旧、と関係するものである。

政治学者は、上記の現象を1945-75年の東南アジアに（更には、最近では、1990-2005年のヨーロッパに）見出している。東インド-インドネシアプロジェクトに従事しているアムステルダムのNIODの研究チームは、体制変容の様々な局面に触れてきたが、必ずしも特定の理論的枠組みのなかでそれを見ているわけではない。しかし、チームに参加したレムコ・ラーベンは、移行学を念頭においてこの特殊な時代についての自分の考えをまとめることを約束している。彼の提案を待ちながら、簡単に1630-80年と1780-1830年の二つの時代を簡単に眺めておきたい。これらは、東南アジアにおいてとくに動乱と錯綜の時代であった。

1630-80年の時代は、植民史の観点からは相対的にはよく知られた時代であるが、内在的歴史の観点からはあまり研究されてはいない。この50年間は、VOCが、様々な地域権力と激しくやりあった時代である。つまり、バンテン、アチェ、マカッサルそしてマタランのスルタン、であり、マラッカのポルトガル人は言うに及ばない。これらのすべての地域政治組織体は、かなり異なった制度的構成をもつ相対的に新しい形態となっていた。ここでは詳しくは立ち入らないが、これらの様々な政治組織体は、すべて貿易の拡大についての独自の予定項目を持っており、これらの間の衝突は、今後の研究にとって魅力的な主題である。

同様のことが1780-1830年についても言える。アジア内の中国貿易の隆盛が立証されるが、これは外国人を中国沿岸海域に導き、その一方で、熱帯産品あるいは鉱物資源をもとめより多数の中国人起業家を、シナ海南縁へと送り出した。伝統的体制の一連の復興は、大陸と陸続きの東南アジア地域（ベトナム、ビルマ、そしてタイ）において起こり、アンソニー・リードによって「最後のアジア自立国家の定立」と特徴付けられてきた。そして海洋地域の東南アジアでは、三回の植民地体制の変容が起こった。（VOC-バタヴィア共和国、イギリスによる臨時統治、東インドにおけるウィレム一世による植民帝国の確立）。この地域における荒れ狂う「海賊」たちは、これらの一連の東南アジア島嶼部における植民体制に、海上の輸送ルートの制海権を再確保することを促した。

この地域におけるこの種の西洋からの干渉の、最もはっきりした影響は、勿論、シンガポール（1819年）における自由港の創設であり、ナポレオン戦争が終わったあとの、マラッカ海峡におけるイギリスとオランダとの間の利権の分割（1824年）⁽⁴⁾である。この押し付けられた状況、こ

れは徐々に固定した、国際的に認定された19世紀の国境形成につながり、そうした状況から、インドネシア、シンガポール、そしてマレーシアという国民国家が、最終的に20世紀に立ち上がってくるようになった。

実際、東南アジアの歴史の中で、これらの特別な時代に再び取り組むことは、これは地域を、ひとつの地方的な、あるいは国家的な、あるいは地域的な視野だけでなく、地球的規模の視野で見ることによるのであり、そしてまた同時に、国際的な歴史家の集団が、体制変容といった新しい戦略を用いることは、ひとつの挑戦である。イド・デ・ハーン教授の下で、ユトレヒト大学の若い歴史家たちが、最近、オランダ史の凡そ同じ三つの時期について研究を進めているのは、よい知らせである。研究計画を立てる前に、このチームと接触を持つことは興味深くもあり、有用であろう。エンコンパス計画では、アジア出身の学生のための東南アジア史の修士 MA 養成プログラムが2006年9月からライデン大学で開始することになっている。ライデン大学歴史学科は、2007年に体制変容についての試行的な会議を、シンガポール大学と協力して組織したいと考えている。この会議や上記のプロジェクトに関心を持たれた方は、以下に電子メールを請うものである。

J.L.Blusse@let.leidenuniv.nl

(横山伊徳 訳)

(注)

- (1) (訳注) C. A. Bayly, *Imperial Meridian The British Empire and the World 1780-1830* (London, 1989)
- (2) (訳注) 然らば、このヨーロッパとは何であるか？これは旧大陸の岬のようなものであり、アジアの西にある一付属物である。「ヨーロッパ人 l'Europeen」『ヴァレリー全集11 文明批評』(筑摩書房、1967) 47ページ。原文は1924年。
- (3) (原注) たとえば、Ido de Haan, *Transitional Politics and Cultural Reconstruction after Large Scale Violence: an overview of recent literature and a research Design* (Utrecht, public lecture 21-5-2002)を見よ。
- (4) (訳注) ロンドン条約締結をさす。